雨男の毛バリ

宇良谷

雨男（あめお）が父親から明治天皇の崩御を聞いたのは崩御されて半年余りたった頃である。明治から大正に代わるらしいとも言った。

雨男は今年一六歳である。奥三河の段戸山（だんどさん）のブナ林に囲まれたわずかな土地に肩を寄せ合う宇良谷（うらだに）の貧しい農家のせがれである。小学校を出てからずっと親の百姓仕事を手伝っている。

段戸川を一時間ほど下ると大多賀という小さな集落があるが、その大多賀より少し上流に小さな建屋がある。そこが雨男の通った小学校である。民家のような校舎が一つだけ。校舎の前は鉄棒が一つの小さな運動場があった。

宇良谷からは子どもの足で一時間余りかかるが、段戸川に沿った杣道には雨男を先導するようにうさぎや狐が出るのはいつものことで特段驚くことでもなかった。

宇良谷から通う子どもはわずか三人だった。春になれば山菜は道

端にいくらでもあったが誰も採らない。奥深い宇良谷まで来る人はほとんどなく、子どもらにとってはただの草にすぎなかった。ヤマブドウやアケビを採りながら帰る秋の道草は雨男にはなにより楽しいものだった。

とりわけ段戸川を覗く楽しみが雨男にはあった。学校の行き帰り、あとの二人を先に行かせて雨男だけが決まって足を停める場所があった。そこは宇良谷から子どもの足で三〇分ほど下ったところにある淵である。

淵の頭、左岸にある小さな家ほどの岩が流れをせき止め、細いだけに強い流れとなってドォ、ドォッーと音をたて、落ちた先には底深い青い淵がのぞいている。

ひとしきりの白泡がしばらくして細い筋となりやがてポツポツと泡が消えるあたりは、拳くらいの石と小砂利のゆるやかなかけ上がりになっていて、清冽な水を通して子どもの拳を五つほど並べた大きなアメがいるのが決まって見えた。雨男にも優に尺はあることがわかる。

淵には無数のアメが泳いでいるが、雨男にはいつもかけ上がりのそいつだけに目が向くのだった。ときどきユラッと動いて口を開

け、また元の場所に戻る。食った！雨男にも餌を食ったことがわかった。

ときどき白っぽい羽虫が流れてくる。大きな口をあけ、ゆったりと羽虫を吸い込んだ。アメは急いでいない。アメが餌をとったあとには小さな波ができ、波の輪は次第に大きな輪になりやがて消えていく。

雨男はかけ上がりのアメを見るのが楽しみだった。今日もいる。それだけで嬉しい。これは雨男だけの楽しみで、魚に興味のない二人には大きなアメのことを話したことはなかった。

雨男は小学校を出るとすぐに親の野良仕事の手伝いをするようになった。下に三つ違いの弟がいたが、百姓を継ぐのは長男の定めで当たり前のことだった。弟の名前は晴男だった。自分は雨なので弟は晴れにしたのだろうと思っていた。

奥三河の宇良谷あたりは愛知県でもっとも寒いところである。原生林に囲まれ平地も少ないところで、雨男の家も小さな猫の額ほどの田んぼと、わずかばかりの野菜畑があるばかりで、ここにしがみつくように暮らしていた。

大多賀までは電気が来ているとは聞いたが、さらに奥深い宇良谷

の暮らしはランプとロウソクであった。わずかな陽が差すだけの山の狭間は暗くなるのも早く、夜はランプの明かりが頼りである。暗いランプの下で父親は縄をなったり、母親は縫い物をしてわずかな手間賃だが家計の助けになるようにと夜も働きづめだった。雨男は働いても、働いても貧しいこんな暮らしからいつか必ず抜け出てやると思っていた。

そんな宇良谷の暮らしであったが、どこかに楽しみを見いださなければ人は暮らしていけない。父親の名は竿次（かんじ）だった。なぜ竿次なのか雨男は聞いたことがなかった。宇良谷で生まれ、宇良谷で命を終えるのだろう。

歳は四〇を少し越えた頃であったが髪には白いものが混じり、日焼けした顔に深い皺がきざまれている。うつむき加減の姿勢のうえに、いつも下に目をやるクセが日頃の仕事の厳しさと、先の見えない暮らしぶりを物語っているように雨男には思えた。母親は働きものだったが竿次にもまして無口な人だった。それゆえ家は火が消えたようで、会話らしい会話がなく雨男にはそれも宇良谷の暮らしから抜け出たい理由だった。

そんな竿次の唯一の楽しみが毛バリだった。気晴らしということ

もあるが、釣ったアメを肴に酒を呑むのが楽しみだった。竿次の毛バリはむしろ酒の肴のためと言ってよかった。アメを肴に安酒を呑んで田んぼ仕事の疲れを癒やすのだ。

ときどき赤い斑点のある焼き魚が夜のおかずに出た。竿次が釣ってきたものだ。大きいのは竿次の酒に、小ぶりのアメは母親と子どもである。雨男も弟もたまのおかずのアメを心待ちにしていた。

「なんちゅう魚だ？」

「アメだ」

竿次の返事はいつも決まっていた。竿次の毛バリで雨男の家では魚を食べることができたが、宇良谷で魚がおかずになる家はほとんどなく雨男の家は恵まれていた。

竿次の教え

竿次が毛バリを始めるのは宇良谷に遅い春が来て、新緑の木々に山藤の花がまとわりつくように咲くのを見てからで、それまで決して竿を出さなかった。

「藤が咲いたな、毛バリだ」

この頃になるとボソッと言うのを雨男は何度も聞いた。

竿次の竿は真竹をナタで切って枝を払っただけのものであるが、払った節を出刃で丁寧に削っていて、竿の扱いから毛バリへの愛着がみてとれる。長さは一〇尺くらいである。

ニギリはつけない。ニギリは竹の端を斜めにナタでスパッと切っただけの、そのまま土に刺せそうなつくりである。枝を払いそのあとを出刃で丁寧に仕上げるのに比べ、ニギリのつくりはぞんざいである。繊細なところがある反面、気まぐれな竿次の性格を竿にみることができる。

竿次は青竹を切っただけの竿はすぐには使わなかった。一年寝かせておいたのがいい、と雨男に教えていた。青竹は重いのと釣っているうちにクセが出て、竿がひん曲がってしまうからダメだというのがその理由である。そんなわけで軒下にはいつも三本の竿が寝かせてあった。いずれも薄茶の枯竹である。ある日

「毛バリ、行くか？」

と声をかけて来た。田んぼの水張りが終わり、あとは苗を植えるだけである。代掻きが一段落したあとだった。はずむような声の調子で竿次の気分がいいのがわかる。

「アメか？　なら行く」

雨男はふたつ返事で返した。竿次が雨男を毛バリに連れていくのは初めてだ。一緒に行きたいとは思っていたが、竿次が声をかけてくることはこれまでなかった。

教えると言ってもちょっと歩けば段戸川である。いつでも毛バリはできるのにと思っていた雨男には、竿次が声をかけてくれたのが心底うれしかった。

「雨男、お前ももう十六だが。二十歳になりゃお前も兵隊ずら。毛バリを教たるが。兵隊にいきゃ、生きて帰れるかわからんからな」

竿次は軒下から竿を一本とって軽く二、三度振って「うん！」と言った。

竿次の教えは一つ、一つ丁寧だった。一つ屋根に暮らす親子である。これが今生のわかれでもあるまいし、気まぐれな竿次にしては珍しいと思いながらも竿次の言葉と手先に集中した。

竿次は弁当箱ほどの柳ごおりの蓋をあけ、黒い糸をつまんだ。

「これが道糸だ。馬素（ばす）って言うんだ。うちのヨシの尻尾の毛を抜いたんだ。それを撚ったもんだ。馬の尻尾はメスがいいんだ。ヨシはメスだから毛もいいんだ。だけどよ、いっぺんに抜くと馬も痛いか

ら一本ずつ抜くんだ。落ちている毛は弱いからダメだ」

尻尾を数本撚って四〇センチくらいにして、それを何本も繋いでいることは雨男にもわかった。だんだん細くしてムチのようにしているんだな。

「馬素は弱いからよく切れる。切れたら、切れたのを抜いて、毛をつなげばいいんだ。九尺くらいがちょうどいいだに」

これが鉤素（はりす）だと言って半透明な糸を見せてくれた。

「ヤママユガっちゅう虫がおるがや。お前も知ってるだろうが。あの虫の腹をしゃくと、白い線が出るんで、それを酢につけておくんだ。そのあとブリキに小さい穴をあけといてそこに通して引くと鉤素がきるんだがや。尺の鉤素ができれば上出来だな」

ひとくさり説明した後、

「そうだ、鉤素は乾いてパリパリしとるで、釣る前にしばらく水につけておきゃ柔らかくなるで」

とつけくわえた。鉤素は尺くらいの長さがあればいいらしい。

これが毛バリだと茶色い毛バリを雨男に見せた。太い軸のハリに黒い木綿糸で胴を巻いて、茶色い羽根を巻いてあるゴツイ毛バリである。羽根の径は半寸くらいある。蓑毛（みのげ）だと言った。毛バリにはす

でに尺くらいの長さの鉤素が結んであった。
「ハリはどうしたが？」
「ハリはよぉ、叔父さんが名古屋の町に行くっていうから頼んで買ってきてもらったもんだ」
丁寧に折りたたまれた茶色い油紙の中に一〇本くらいハリが入っていた。色は黒茶である。軸が太くてがっしりしたハリで、おそらく海で使うハリなのだろう。鉤素を結ぶようにチモトは平らに打たれていた。
「羽根はヤマドリでなきゃだめなんか？」
「なんでもいいずら。家にヤマドリの羽根があったからヤマドリだ。キジの羽根だっていいんだ。今度、キジが死んでたら羽根むしって来い。メスの胸の毛がいいらしいって聞いたことがあるぞ。鉄砲撃つ猟師はカモの羽根を持ってるから、分けてもらってもいいが」
竿次は道糸の先にある丸い輪が乳輪だと教えてから、竿先の紐をヘビ口だといった。たこ糸を撚ったものだ。
「ヘビの舌に似てるだろうが」
とプルプル振った。竿次は乳輪をヘビ口に結びんで、ほどくこと

を何度もやって見せたあと
「ほれっ、やってみりん」
と雨男に渡した。覚えがよく手先の器用な雨男には簡単なことで一度でできた。竿次はやさしい目をして雨男の手先を見つめていたが、小さくうなづき「それでいい」とボソッと言った。
後ろについて来いと雨男に手招きした。釣るところを見せたいようだ。藪を分けると段戸川の瀬音が次第に聞こえてきた。視界がひらけた先には段落ちと瀬をくりかえす流れがあった。竿次は腰のあたりで数回、手で押さえるしぐさをしてシッ！と言った。姿勢を低くしろ、声を出すなということだと雨男にはわかった。
竿次の後について川に入った。苗代づくりのあとの百姓姿のままである。スゲ笠と、首には煮染めたような手ぬぐいが巻いてある。モモ引きとワラジのドロを川の流れが落とした。雨男は水に春のぬくもりを感じた。
ワラジは生まれたときから履きなれている。ワラジからは五本の指が出る。一六歳ではあるが、すでに指はコチコチに固まって痛みすら感じないようになっていた。
竿次は静かに歩け、ガシャガシャ音を立てるな、後ろにつけと言

った。真後ろから毛バリを見せたいようだ。雨男は竿次の後ろにまわり、中腰になって見守った。

初夏を思わせる陽気だった。風はない。若いウグイスのホッー、ホケッという鳴き声が聞こえた。陽が山の端に落ちマズメが近い頃であったが段戸川の水を雨男は冷たく感じなかった。

まだかと待つ雨男にはもどかしい時間が過ぎたが、竿次はすぐに毛バリを振らなかった。いくらでもアメはいる。大物を釣る所を見せたいようだ。小さくピッシャっと飛沫が飛んだのが見えた。

「アメがハネた！」

と竿次が言う。だがすぐには毛バリを振らなかった。竿次は腰をかがめたまま動かない。身じろぎもせず見ている。なぜ毛バを振らないのか？パシャとさっきと同じ場所で同じような小さなハネがあった。

竿次が動いた。竿を下流に倒し、一度、道糸と毛バリに目をやった。横に寝かせた竿をサッ！と立てたと同時に毛バリを振り込んだ。毛バリは静かにポトッと羽虫のように水に落ちた。

毛バリがスッとわずかに流れたそのとき、ガバッ！ともバシャ！とも聞こえる音と同時に銀色の魚体が左から右へ空を跳んだ。魚体

に青い印をいくつもつけ、赤い点をちりばめた魚がくっきりと静止して、あたかも刻が止まったかのように雨男には見えた。

ズシャッと音がして、アメが没したわずかな後、竿次はグイッと竿を立てた。ビシッと道糸の張る音が聞こえた。

「雨男！　でかいぞ」

川音が消えるような大きな声で竿次は言った。竿次の竿は先から三尺くらい-のところからキュッと曲がっている。道糸の糸鳴がする。

竿次がどんな合わせをしたのか、毛バリだけ見ていた雨男にはわからなかった。竿次はほとんど動かない。河原を歩くことなく、魚の動く方へ身体を向けるだけで、時折の引き込みには立てた竿の角度はそのままに竿を前に出すようにして魚をあしらう竿次の竿さばきに雨男は見とれていた。

やがて観念したように銀色の魚体が浮かんできた。弱ってきたことは雨男にもみてとれる。しもての右岸は砂利混じりの砂場である。竿次はチラッとそこに目をくれた後、グイと竿をあおり、アメの口を水から出して一度空気を吸わせた。竿を寝かせ、アメを浅瀬に引きづりながらヨッォ！というかけ声とともに一気に砂場に上げ

た。

アメは砂にまみれてバタバタしていたが、竿次は慌てることなくゆっくり歩きアメをつかんだ。アメをつかんだ親指と薬指の間が二寸はあるような幅広のアメだった。

「オスだ」

竿次はポツリと言った。どうしてわかるのかと雨男は思った。竿次は雨男を見でわずかに口角を上げニコッと微笑んだ。小さい目がより一層小さく見えた。家では決して見ることのなかった竿次の顔である。

アメノウオ

「これがアメだ」

竿次は雨男の前にグイッと差し出した。口をパクパクさせているアメにはもう暴れる体力はないようだった。

「アメノウオちゅうんだ。なんでアメというか知らんが、昔、親父から雨が降ると釣れるからアメノウオだと聞いたことがある。みんなもアメとしか言わんが、俺も雨の日によく釣れるからアメノウオ

と言うんだと思うな」

「アメか、そうか！」

雨男はピンと来た。

「俺の名前は雨男だけど、俺はアメか？」

「そうだ、雨の日にアメが釣れるから、お前を雨男にしたんだ」

なんと親父は俺の名をアメノウオから雨男としたのか。この歳になってやっとわかった。

なんで俺は雨男なのか。雨男という名前が嫌でたまらなかった。遊び仲間はアメオ、アメオと呼んでいたが、雨と男の漢字を知ったころから「やーい、雨おとこ」「お前と遊ぶと雨んなる」とからかいの的になった。子どものからかいは手加減がない。

学校を出た後でも、雨男ではジメジメした男のように思われないかとか、将来、雨男というだけで嫁も来ないのではと、雨男と書くたびに心が重くなるのだった。

だが竿次が釣ったアメを見て、アメってこんなに見事な、完璧な魚なのかと驚いた。砲弾のように張りのある銀色のつややかな肌、エラから尾にかけてうっすらした青にも紫にも見える縦長の印がいくつも並んでいる。

なにより雨男の目を引いたのが赤い点である。赤でもなく、さりとて朱でもない点がくどくもない数でほどよく体側に散りばめられている。すべて完璧だ、アメは完璧な魚だ。

親父は俺にアメのような完璧な男になることを願ってつけたに違いない、と雨男はそのとき思ったのだった。

そうなのか？と聞かなかった。聞いても竿次はまともに応えはしないだろう。でもいい。雨男は嬉しかった。雨男はアメノウオ。完璧な魚。それだけで前を向いて歩ける気がした。

竿次の毛バリは上手かった。それは雨男にもわかった。接近するときの姿勢が低く、しかも水にはできるだけ入らないようにしている。一旦、場所を決めたらそこから毛バリを打てるところはすべて打ってから動くので竿次の姿はいっとき岩になったように見える。

「アメはな、二つ半だ」と竿次が言う。

「二つ半？」雨男が聞き返した。

「アメはな、毛バリが落ちてから二つ半で出んだ。一つ、二つ、三つの三つの前だ。三つじゃ遅い。二つ半で出んだ。だから、三つも、四つも流しちゃダメだ。毛バリが落ちたら二つ半で出るから、そこで待ってりゃいいんだ。ほら出た！てなわけだから合わせ損な

うのは少なくなんだ」

事実、竿次の毛バリを見ていると、いつでもどんな振り込みをしても二つ半で合わせている。アメがそれで掛かることもあるが、出なくても二つ半で跳ね上げている。

なんで二つ半なのか、竿次に聞いた。

「アメはよぉ　毛バリ見て、おっかけて食うのを二つ半でやんだ」

雨男にはふぅんとしか思えなかったが、それがアメの習性だと竿次は言っているようだ、

「雨男、俺は親父から毛バリをおすかったんだ」と竿次はポツリと言った。

雨男が生まれたときには爺さんはすでにいなかったので爺さんのことを聞くことはなかった。なんと爺さんも毛バリをやっていたのか。

竿次は石に座れと手招きして爺さんのことを話し始めた。すでにあたりは暗くなりかけていたが、毛バリを教えたことで、自分が親父から教えてもらったことを思い出し、伝えたくなったのだろう。

「俺の親父は下の町の足助（あすけ）にいたんだ。若い頃は道楽もんだったみたいで釣りばっかやってたらしい。お袋が言うんだから本当だろ

う。足助のあたりじゃ釣りやる奴はポンとか、ポンツクって言われるんだ。親父はポンの仲間に入ってアメの毛バリをやっていた。釣った魚は足助の店に買ってもらったらしい。足助には料理屋も宿屋もあるしな。結構、いい金になったと言うが、いつまでもポンじゃなかろうと嫁にもらったのがお袋だ。どこか住むところを探して宇良谷に来たというわけだ」

竿次にしては饒舌だった。節目がちに訥々と話した。

「親父は宇良谷でも毛バリをやったんだ。なんせ目の前が川だもんな。だから親父は俺に竿次ってつけたんだ。よっぽど毛バリが好きだったんだな。お前の歳ごろになったとき毛バリを教えてくれた。俺も毛バリは好きだったしな。親父の後をついて歩いたが親父は自分の竿は一度も振らせてくれなかった。俺も毛バリをやるようになって、一度だけだが親父が俺の毛バリをみて、お前も一人前のポンだ、と言ったときは嬉しかったな。そんな親父も俺の歳ぐらいのときポックリ逝っちまって、あとはお袋と二人で田んぼと畑仕事だ。苦労したな」

竿次にそんなことがあったことを初めて知った。爺さんも毛バリをやってきたんだ。会ったことのない爺さんだが同じように竿次に

教えていたのだろう。胸のあたりがポッと暖かくなるのを感じた。
竿次は最後にポツリと言った。
「釣れるからって馬鹿みたいに釣ったらダメだぞぃ。残して釣るんだ」
竿次が毛バリを始めた頃、宇良谷一帯が大雨になり、段戸川源流部がひどく荒れたことがあったそうだ。親父が魚を残して釣れって言ったのを守ったのでかろうじてアメが残ったが、釣れるままに釣っていたら、どうだったかと言う意味のことだった。
この日、竿次は一度も雨男に竿を振らせてくれなかったが、爺さんも竿次に竿を持たせなかったからだろうと雨男は思った。
その夜、雨男は水面を割ってズザッと跳躍するアメの夢を見た。アッ！と思わず声が出て右腕がビクッと動いた。それがきっかけで夢から覚めた。夢か。家族は深い眠りの中だった。俺も毛バリやりてぇ。

塩の町

翌朝、雨男は俺も毛バリやりたいから教えてくれと言ったが、竿

次はナタと出刃を黙って渡すだけだった。もう教えた。あとはお前一人でやれという無言の言葉だった。

雨男は野良仕事の合間に竹を切り、夜にはランプの下で枝を払い、節をとった。ニギリは竹をスパッと切っただけの竿次の真似をした。馬素も鉤素も竿次の見よう見まねで作った。竿次からハリを一本もらいヤマドリで毛バリを巻いた。ハリを渡すとき、ボソッと「大事にしろ」と言った。

ときどきチラッと見るだけで竿次は一切、口を挟さまなかったが、竿だけはまだ使っちゃ早い、来年だぞ、という意味のことを言った。川での饒舌が家では別人のように無口であった。

晴男も学校を出で野良仕事の手伝いのができるようになったので、兄弟二人して夜は縄なえの仕事をした。竿次は縄なえの手を止めることなく、聞こえるかどうかの声で毛バリのことをポツポツと話した。雨男に話しているようでもあり、晴男に向けているようでもある。こすいアメの話とか、毛バリの振り方、合わせなど同じ話を夜ごと話すので、雨男には毛バリのすべてが頭に入っていた。俺に毛バリのすべてを教えたいという竿次の気持ちが伝わってきた。

竿次は雨男が仕掛けをつくることだけは許していた。どっちみち

あと四年もすれば兵隊にとられる。兵隊にいけば生きて帰れるかわからない。今のうちだけだ、という思いがあったからだろう。爺さんは早くに亡くなり、母親と二人暮らしだったので竿次は兵役を免除されていた。

季節は巡り宇良谷にも遅い春が来た。冬の寒さが厳しかったためかいつもの年より山藤の咲くのが遅かった。

「藤が咲いた、毛バリだ」

と竿次がポツリと言った。その言葉で毛バリができるぞと雨男の心は騒いだ。

ある日、田んぼ仕事の終わった夕方、雨男が軒下から竿を下ろしたのを見た竿次が「お前いくんか?」と聞いた。「おう!」と声を残して足早に川へ向かった背中に「お前もポンだなぁ」という竿次の声が届いた。

その日、雨男は四匹のアメを釣った。笹にさしたアメを母親に差し出した。おや!雨男が・・と母親は声を出し、雨男がね・・言いたいのをこらえて竿次にアメを見せた。竿次は笹にぶら下がったアメをチラッとみて、うん!と小さくうなずいたが、雨男に声をかけることはなかった。

その夜は麦と雑穀まじりの飯と味噌汁と漬物だけの貧しい食卓にアメの塩焼きがついて、会話はほとんどなかったが皆の心がほっとゆるんだのが雨男にはわかった。

以来、野良仕事の後、わずかな時間でも雨男は竿を出して食卓をにぎわした。家族が喜ぶ顔を見るのは雨男にはうれしかった。雨男が毛バリに行くにつれ、竿次は次第に竿を出さなくなっていった。

そんなある日、母親から足助で塩を買うように頼まれた。足助？一瞬、遠いなと思ったが、すぐに「行く！」と返した。足助までは一六歳の少年の足でも下りで四時間、上りで五時間はかかる。段戸川を大多賀まで下り、その足で中馬街道に出て伊勢神の峠を上り、そこからは下りが続くが二時間はみなければならない。だが足助に行けば菓子も買えるし本も読める。宇良谷からすれば都のようなところである。

母親が塩を買うように頼んだのは足助が塩の町だからである。三河湾の塩を船に積んで矢作川へ、矢作川から巴川を遡り、足助の町に塩を集積していたからだ。足助からは馬の背に塩を振り分け、中馬街道で飯田をへて信濃に運ぶ。塩の行く着く先が塩尻だった。塩尻の名前はそこから来ていると学校で教えてもらったことがあっ

た。

母親は雨男の手に銭を渡した。塩の銭より少しあったのは足助で遊んで来い、晴男に土産を買って来いという親の心遣いだった。

段戸川を下り、くだんの淵を覗いたのは何年ぶりだろうか。そっと覗くと、いた！　あのかけ上がりだ。待てよ、あのアメは昔のアメじゃない。アメの命は二、三年と竿次が言ってたから別のアメに違いない。以前のアメよりずっと大きいように見える。それにしてもまったく同じところにいて、同じようにゆったり餌を食っている。アメのつくところは同じなんだな。よーし、足助から帰ったらこいつを毛バリで釣ると決めた。

対峙

その日は、代掻きも終わり田植えを待つだけの日だった。三時ごろには仕事も終わったので、竿次に一言、行ってくると言葉を残して段戸川を下った。初夏を思わせる陽気で、気持ちのいい南からの風が雨男の足どりを早くした。色とりどりの新緑が雨男を包むようであったが、雨男の眼中にはなかった。

雨男の心は急(せ)いでいた。早く竿を出したい。次第に早足になった。淵に着く頃には額からドッと汗が吹き出していた。首に巻いた手ぬぐいで汗をぬぐった。手ぬぐいから野良仕事の汗の匂いがした。

淵についた。杣道からそっと覗くと「いる！」いつものかけ上がりでゆっくり左右に動きながら時折、大きな口を開ける。食ってる！

時々、ゆらっと水面に出て白っぽい羽虫を食って、また戻る。下流に流れた羽虫を追ってアメも下る。そんなとき、自分と目が合うのでないかと思わず首をすくめる雨男であった。

道から淵の下流に下りた。笹や折れた枝がワラジの足にまわりつくが、連日の百姓仕事で雨男の足はそんなことで傷つくようなやわな身体ではもはやなかった。

もう何回も毛バリを振っているので手順はわかっている。まず。乳輪をヘビロに結ぶ。だが、こきざみに手が震えてうまく結べない。乳輪がヘビロに通らないのだ。落ち着け！　ゆっくりやれ！雨男は何度も声を出して落ち着こうとした。心臓の鼓動が早い。早鐘のようにドクドク打つ。落ち着け！

やっと結べた。スルスルと道糸、鉤素を出すがバリバリしているので一度、水に馴染ませなければならない。

雨男はしばらく道糸と鉤素、毛バリを水につけておいた。蓑毛はヤマドリだ。この間にも心臓の鼓動は収まらなかった。足がフワフワして自分の身体ではないようだ。水の冷たさも感じなかった。口が渇いている。雨男は水をすくって飲んだ。

ひとしきり水につけた後、雨男はニギリをもってビシッと竿を一振りした。ビシャビシャと上がった飛沫が霧のようになって消えていった。

いよいよだ。でかいアメはこすい、が竿次の口ぐせだった。アメはこすいから姿みせちゃだめだ、腰を落とせ、音を立てずに歩け、水に入るな。

雨男は腰を落とし、にじり寄るようにして淵に近づいた。左手に身を隠すに手頃な岩がある。そこにそっと身を寄せて淵を見た。アメは気づいていない。

毛バリを失くすなと、竿次はくどく言った。アメはいくらでいるが毛バリは貴重だぞ。木に引っかけたらなんとしても取ってこい。

雨男は毛バリを木にかけないか周りを見渡した。竿は一〇尺、仕

掛けも一〇尺。ニギリの端に毛バリがある。

雨男は鉤素をクンクンと軽く引いたあと、チモトがしっかり結ばれていることを確かめた。雨男は竿次がやったように竿と仕掛けを下流に倒した。こすいアメには竿をみせちゃダメだ、一回で振れという竿次の教えである。

雨男は岩から顔を覗かせ、かけ上がりをみた。相変わらずゆらゆら動いて餌をとっている。羽虫を食った！　今、毛バリを落とせば食う！と雨男は思ったが、待った。

竿次が雨男に初めて毛バリを教えてくれた日のことを思い出していた。竿次はすぐには毛バリを振らなかった。もう一回、羽虫を食うのを待ってから毛バリを振ったのだ。そうか、あれば羽虫を食う間合いがあるから、間合いを計るためにすぐに毛バリを振らなかったのだ。

雨男は待った。また羽虫を食った。羽虫を食う間合いがわかった。改めてニギリを握り直した。ニギリは手の平の汗でベタベタしていた。

雨男は流れの筋とアメが羽虫を食っている場所を確認した。白泡がやがて細い白い筋になりポツポツと泡に代るところである。よく

見ると底石で小さく二つに分かれた流れが再び集まる筋でアメは食っているのだ。あそこにいれば目の前を餌が流れてくる。

わかった。雨男はサッと竿をたて道糸を小さく後ろに振り上げ道糸がピッと後ろで張るわずか前に、ニギリを軽く前に倒した。馬素は細いムチのように飛んで毛バリを運んだ。

毛バリは静かに水に落ちた。毛バリが筋に乗ってわずかに流れたとき、アメもスッと浮き上がって食う体勢になった。食え！　食え！　ニギリを持つ手に力が入った。心臓がドクン、ドクンする。

食え！まさに毛バリがアメの口に入る寸前にアメは食うのを止めたのだ。スッ沈んで元の場所に戻った。

あ！どうした。食うと思ったのに。なぜだ。雨男は毛バリを引き上げた。

二つ半

なぜだ？なんで食わない。こいつはこすいアメだ。アメが毛バリを食わないわけを竿次が教えてくれたことはなかった。毛バリのつくりが悪かったのか？　いやそんなはずはない。これまでもこの毛

バリでアメは騙されてきたんだ。
なぜなのか雨男は岩に隠れてしばらく考えていた。アメは毛バリがわからない意味のことを竿次が言ったことがある。
「あいつら目が悪いで、細かいところはわからん。虫らしけりゃいいんだ」
そうか毛バリのつくりが悪かったんじゃない。ならなんだ。雨男は竿次の言葉を思い出そうとしていた。そう言えば親父は筋、筋、筋が大事だと言っていたな。「筋を流せば食うだ」と。
わかった。そうか！アメが寸前で食わなかったのは筋をはずれて流れたからだ。毛バリは筋だ。筋を流せば食う。しかし、どうやったら筋を流れるのか。鉤素をピンと張ったら毛バリが筋をはずれるから鉤素を緩めたらいいんじゃないか？と思った。絶対そうだ。そうに違いない。今度は絶対食わせるぞ。
再びかけ上がりに目をやった。アメは何ごともなかったようにゆらゆらと右、左に動いてときどき口を開けている。
よぉし、今度こそだ。雨男は竿を倒してから、筋と毛バリを落とす場所を確認した。頭の中で筋だ、鉤素を緩めるんだと唱えた。また鼓動が早くなった。

毛バリはストッと水に落ち、筋に乗って流れた。出る！　出るぞ！アメがスッと浮いて大きな口を開けた。食え！　アメは静かにスポッと毛バリを吸い込んだ。茶色い毛バリが雨男の視界から消えた。

食った！　雨男はグイと竿を立てた。一旦沈んだアメの頭が水に出てバシャッと激しい飛沫が飛んだ。やった！　でかい。ずしりとした重みが竿から伝わってくる。ギュンギュンと糸鳴りがする。絶対ばらしちゃなんないぞ。

アメは淵の中にグイグイ潜ろうとする。これはいかん。アメについていくしかない。無理に引っ張れば鉤素が切れる。竿を立てろ。竿を寝かしたら鉤素が切られる。雨男は竿を立てたままアメの後を追って数歩歩いた。絶対に潜られちゃならんぞ。鉤素が石で切れる。雨男の頭には竿次の教えやら自分の思いつきがグルグルとまわっていた。時間にして一分か、二分、あるいはもっと長かったかもしれない。

銀色の魚体が見えた。アメが身体を横を向けたのだ。少し弱ってきた。取り込みにかかろうとしたが、振り込む前にどこに取り込むかを雨男は考えていなかった。

下流にチラッと目をやるとかけ上がりのしもては一段の段落ちになっていてそこから早瀬がしばらく続く。瀬に入られたらやっかいだ。どうする。淵で取り込むか、一段落とすか。どうする。淵なら近くまで木や竹がせり出しているから、下手をすると道糸をからませる。

雨男は思いのほか冷静な自分に驚いた。淵で取り込むことに決めた。さしものアメも弱ってきた。それまでは雨男を引き回していたが、雨男が竿を引けば身体の向きが変るようになってきたからだ。

ググッと引き寄せた体側にあざやかな朱点がみてとれた。取り込むぞ。雨男は玉砂利ほどの石でできた二畳ほどの広さの右岸に向けて竿を倒し、アメを誘導した。アメが横たえときに一気に抜くしかない。「ためらったらダメだ」と口に出した。玉砂利のきわまで寄せて、よぉ!と声を出してアメを抜いた。竿次がしたように。

アメは乾いた石の上でビトン、ビトン跳ねている。口からは毛バリで傷ついた血が出ていた。雨男は親指と小指を広げ、アメに手を添えて長さを測った。長さは二つ半だった。「尺五寸だ!」と雨男は声に出した。竿次のアメより一回り大きいオスだ。完璧な姿をしたオスだった。

まだ息がある。雨男はハリを外して両手でやさしくつかみ水際に運んでそっと流れに入れた。アメは雨男の手の中でゆっくり身体を起こしパクパクと何度もエラを広げた。アメ色の背にはポツポツと黒い斑点が見えた。雨男は静かに両手を離した。アメは一、二回尾びれを振ると、ゆっくり、ゆっくり淵の中に消えていった。雨男はアメが消えた先を見ながら「これでいい」とつぶやいた。あのアメは俺だ。殺しちゃなんない。生きろ！

「雨男はアメ。アメは俺だ」薄暗くなった帰り道で雨男は何度も声に出して言った。目をつぶればアメが毛バリを吸い込んだ瞬間が見える。耳にはビンビンと響く馬素の糸鳴りが聞こえる。ギュッと手を握ってみた。アメの強い引きが手に残っている。

あぁ、俺はあのアメを釣ったのだ。あのアメを釣った、いや「とった」ことで雨男には男としての自信が静かに沸いているのを感じていた。それは家が近づくにつれある思いに繋がっていった。

家に帰った雨男に竿次は釣れたか！と声をかけた。雨男は大きくうなずいて「おう！」とだけ返した。その声の大きさに竿次は雨男がでかいアメを釣ったとわかったが、それ以上何も言わなかった。

春が終わり、田んぼの稲が一尺ほどに育ったとき雨男は家を出た。竿次も母親も止めはしなかった。雨男はアメだからなと竿次はボソッっと言った。

このまま百姓やって宇良谷で一生暮らすことはできない。俺はアメだから。雨男の強い意志だった。宇良谷では雨男が足助に出たとも、名古屋に行ったとも噂したが竿次は何も言わなかった。

雨男は名古屋の叔父のつてで堀川端の魚問屋の丁稚になっていた。仕事はつらかったが電気も水道もある暮らしは極楽のようだったと後述している。そこでアメノウオを鯇と書くのを知った。そのとき鯇（あめお）男と改名している。

二〇歳で兵隊にとられている。名古屋第八歩兵連隊に入営し、満洲に派兵された。冬の極寒のソ満国境の警備は死を覚悟する日々だったという。兵役を終えた鯇男は夜も昼もなく働き、四〇を前にして念願だった川魚問屋を岐阜の柳ヶ瀬に開いている。

長良川の鮎とウナギ、それとアマゴが主だったが、鯇男の店ではアマゴをアメ、アメノウオと呼ぶように店員に徹底させた。戦後まもなく五五歳の若さで亡くなっている。今は四代目が柳ヶ瀬の店を継いでいるが、今もアメノウオである。

鯇